

編集後記

ようやく年報二五号を刊行するはこびとなった。本号は「グループ研究」等からの「特集」の申し出がなかったもので、一般応募論文で編集した。論文五編、研究ノート三編、という構成である。「書評」は慣例にしたがって所員の近刊の著書を取り上げ、学外の研究者にお願いした。常行所員の著書については椎名氏に書評をお願いしたが、書評の枚数をオーバーしており、しかも常行所員の意欲的な労作に対する真の学問的対決は単なる書評に止まっていけないと編集委員会（大谷、石塚、矢吹）で判断し、「書評論文」扱いとした。お忙しいなか心よく書評をお引受いただいた椎名氏をはじめとする油井、片野の三氏に心からお礼申し上げたいと思う。また、大学の会計処理上至上命令である年度内刊行を予定通り実現しえたのは、執筆者各位のご協力もさることながら、出版社と執筆者との間に立って連絡等ご協力いただいた社研事務担当竹内佐和子氏の御蔭である。心から感謝する次第である。

社研は昨年七月創立四十周年記念シンポジウムを開催したが、社研「年報」も一九六六年に第一号を刊行して以来本号で二五号を数えるに至り、ここに四半世紀の歴史を刻むこと

となった。社研にとって大きな節目の年である今年度は、その運営面でも一つの転機となる。大友福夫前所長に引き続いて、五期十年の長きにわたって所長として社研の運営にご尽力下さった三輪芳郎所長が今月三月末をもってたく御定年を迎えられるのである。

三輪所長の御在任中の十年間は、氏の社研にかけける情熱とその国際的な交流の広がりやを反映して、長い社研の歴史の中で「国際化」の面で社研の高揚期として特筆されるのではないだろうか。編集子が特に印象深かったのは、現在転機を迎えているペレストロイカの渦中にいるマルトウイノフ氏（一九八四年）とアバルキン氏（一九八九年）を囲んでの研究会である。

昨年十二月の総会で三輪所長に引き続く新所長として経営学部教授の麻島昭一所員が、そして新事務局長として高橋祐吉所員（経済学部）が内定している。経済学部以外の所員から所長が選出されたのは初めてのことである。まさに社研が全学的な学問的結集の場としてさらに発展していくことが期待されている。専修大学学長、理事長、大学事務当局にも、従来にも増して一層の財政的御支援をお願いする次第である。末筆になったが、印刷技術上難しい面が含まれていたにもかかわらず、編集にご協力いただいた公人社・大出明知氏にも心からお礼申し上げますと思う。

（一九九一年二月 編集担当 矢吹満男）